

# 「本多秋五のことなどー渡辺綱雄さんに聞くー」

（『淑德国文』第三十四号掲載）における誤記の訂正について

小 倉 齊

【淑德国文】第三十四号（一九九三・二・五発行）掲載の「本多秋五のことなどー渡辺綱雄さんに聞くー」をお読みいただいた本多秋五氏よりお手紙を頂戴し、渡辺綱雄さんの記憶違いや私自身の誤記についてご指摘いただきました。お手紙のなかの指摘をご披露することで訂正とさせていただきます。

① 七四頁下段一七行目ー二〇行目「だが、彼は堅実にね、その時分に円タクなんかに乗っておつてもねえ、チエルヌイシエフスキーの創作を読んでたり、それから『戦争と平和』をずーっと読んでるんですよ。」

（私は東大時代にチエルヌイシエフスキーの創作も「戦争と平和」も読んでいません（44ページ）。チエルヌイシエフスキーの「何をなすべきか」（神近市子訳）はずっと後年、平野謙から借りて読みました。「戦争と平和」

は、何度も書きましたが、通信省時代、たしか昭和一二一三年の歳末首の休暇に初めて読みました。）

② 七七頁上段三行目ー下段六行目「当時、第八高等学校から、わたくしどもの『朱雀』とほとんど平行的に、『ハクヨウ』という文学雑誌を出しておりました。ポプラです。白い『白楊』。わたくしもちょっと書いておりますが、その後ろのところに、校長の大塚末雄（？）さんを留任させるためにストライキをやったことがあるんですが、そのストライキに対する本多君の述懐が出ています。雑誌部員本多秋五の「大塚校長を送る」という文章。」

（「白楊」という雑誌（77ページ）は、名前はいつの時代か見た覚えがありますが、私が直接関係したことはありません。「大塚校長を送る」という文章の引用、どうも私が書いた覚えのある文章のような気がするので、熱田中学の校友会誌「瑞穂」第16号を探してみたら、たし

かにそういう題の、そういう内容の文章がありました。だからこれは「白楊」とは関係ありません。「瑞穂」には一年生の都留重人と野々村一雄が、五年生でも書けぬような文章を書いているのを発見しておどろきました。

大塚校長がクビになったのは、われわれ五年生がストライキをやったからで、校長を留任させるためのストライキではありませんでした。

あのストライキの理由は、今でも私にはわかっていません。

多分六月中のことか、暑い日にテニスをしていて、左隅に打ちこまれたボールをとるために走って行って、ラインキーパーの腰かける低い足台みたいなものに右の向う脛をぶっつけて、あくる日からそれが化膿して動けなくなり、三週間ほど学校を休んで、人力車で登校した、その日にストライキが勃発して、わけわからずそれに巻きこまれたのです。

一部の教師を排斥するというのが名目でしたが、その首謀者は学業成績のあまりよくない、多少不良があった生徒たちで、先生方の受けのよくない生徒であったように思われ、とにかく、私を見たかぎりでは、大義名分のはつきりせぬストライキでした。

③ 七七頁下段一五行目「一六行目」とにかく、晩(?)僧房へ立てこもって抵抗したわけですから、お寺でねえ。」

〔晩(?)僧房〕とあるのは、八事の半僧房です。私もストライキの第一日、そこに立てこもって一泊したきりで、あとにもさきにも行つたことがありませんが、今でも勿論あるでしょう。

④ 八〇頁上段二〇行目「下段一行目」本多君の卒業論文についてはすねえ、森鷗外の翻訳も、評論や難しい理論的な部分についても、平野謙君がかなり代筆しましたがねえ。小説についてのところは、わたくしも少し、代筆してあげたりしました。彼が書きとばした、彼独特のねえ、癖のある文字を写すんです。」

〔卒業論文を平野と渡辺が「代筆」したように書いてあります(80ページ)が、これは「代筆」という言葉の誤用で、半分は渡辺、半分は平野に清書してもらったのです。ヤクザな論文でしたが、代筆のできるものではありません。それにしても私は友人にえらい迷惑をかけたものです。

卒論は二百枚ちょっとあり、「はしがき」だけが私の自筆でした。「私に恵まれた二人のよき友達」は百枚づつ清書してくれたわけです。私はそのお礼をした覚えがありません。ひどいものです。

⑤ 八三頁下段三行目「九行目」〔統戦後文学の批判と確認近代文学の軌跡〕には、〔北川静男という男がいて、高等学校の卒業前にチフスで死んだ。藤枝君や僕なども手伝っ

て遺稿集を出したが、典型的な白樺派でした。名古屋の厚生館という大きな病院の末っ子で、親父が森鷗外の友だちで、伝説によると「雁」の主人公とかなんとかで……という平野謙の発言がある。」

（北川静男は本来は藤枝静男の友人で、私は間接の友人でした。彼の父親が創設した病院は「好生館」でした。）

末筆ながら、いろいろご指摘いただいた本多秋五氏に感謝申し上げますとともに、ご迷惑をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます。

一九九三年五月